

稼ぐ観光を進める「はちのへDMO」 来春設立へ

「八戸」の読み、皆さんは分かりますか。

「はっと」「はちと」「やと」…。正解は「はちのへ」。2002年12月の東北新幹線八戸開業後、東京駅で連呼されたこともあり、以前よりは正確に読める人が多くなったと感じている。

八戸市は青森県の南東側、太平洋沿岸に位置する港町だ。臨海部には北東北随一の工業地帯が形成され、産業都市として発展してきたが、産業構造の変化やバブル経済の崩壊により、地域経済は長らく低迷してきた。

新幹線開業は、そんな八戸市に、観光振興への取り組みを加速させる契機となった。「B-1グランプリ」で全国的に有名となった「八戸せんべい汁」、国内最大級の「館鼻岸壁朝市」、屋台村の成功事例として知られる「八戸屋台村みろく横丁」…。これらは全て、新幹線という黒船を迎え入れるために生み出された受け皿だった。

それから16年。今度は外国人観光客という第2の黒船がじわじわと押し寄せ始めている。

青森県の2017年の外国人宿泊者数は前年比6割増の26万人。青森空港の国際化や函館との連携が奏功した形だ。八戸はというと、周辺7町村を含めたエリアで1万9千人にとどまるが、4年前の6倍に急増。インバウンド対策が急がれている。

こうした状況を踏まえ、八戸エリアの観光と物産の振興を担う3団体が合併し、来春に「(仮称)はちのへDMO(観光ビジネス活動体)」を設立する計画だ。

代表者も目的も事業内容も給与体系も違う3団体の統合はかなりの荒療治だが、急激な人口減少で地域経済のパイがしばむ中、国内外からの誘客に活路を見いだそうという関係者の強い決意が感じられる。

実は、八戸市は県内他市と比べ国内客はビジネス客、海外は欧米人が多いという傾向がある。はちのへDMOが「稼ぐ観光」を進める上で、この辺りがターゲットになりそうだ。

デーリー東北新聞社 執行役員営業局長 広瀬 知明



写真左 八戸屋台村みろく横丁で、インバウンドの聞き取り調査を行うDMO設立準備委員会の関係者＝8月22日

写真中央 職員4人体制でスタートした、(仮称)はちのへDMO設立準備室＝6月18日

写真右 館鼻岸壁朝市をレポートする英国人ユーチューバー